

授業の形態と受講

1 講義

》講義に取り組む姿勢

高校までの学習は、教科書の内容や教員の説明を正しく理解し、記憶することが中心であり、これは学習上、大切なことです。しかし、大学での学修は、それにとどまりません。講義では、教員が自らの研究を基礎として、さまざまな前提や立場から専門的な理論や学説を論述していきます。そのため、講義には担当教員の考え方、見方が大きく反映されるのです。

従って、受講する学生も講義内容をしっかりと把握する一方で、真意をよく理解せず受け入れるのではなく、その論理や論旨の妥当性について自分なりに考え、検証していくことが求められます。こうした学びの姿勢が、やがて自らの頭で考え、自らの言葉で発言し、自らが物事を判断していく能力を養うことにつながります。これも大学の講義の大切な目的といえます。

講義の様子。



》様々な講義形態

講義の進め方は十人十色、教員によって実に様々です。例えば、黒板にひたすら板書をする教員もいますし、レジュメ*を配布して板書をほとんどしない教員もいます。板書とレジュメの両方を活用する教員もいます。また、最近では、スライドを利用して授業をする教員が増えてきました。プロジェクタを用いてインターネット画面を映すこともあります。このような視聴覚教材を使って学ぶと、講義が一層理解しやすくなります。

まずは、授業している教員がどのようなタイプなのかを理解して、授業の受け方やノートの取り方を工夫する必要があるでしょう。

》欠席は命取り!?

講義科目に限らず、演習科目や実験・実習・実技科目でも「出席する」ことは前提条件です。高校の授業と違い、教員が教科書どおりに授業を進めるとは限りません。教科書から外れた寄り道の話が、実は重要であることもあります。授業を休んでしまうと、その授業は聞けません。

また、教員は教える講義の内容を15週のストーリーとして考えています。テレビドラマを1週見逃すと、大筋は理解できても細部の理解はできなくなってしまうのと同じように、授業の内容も十分な理解ができなくなってしまうます。

また、授業に主体的に取り組む上での最も基本的な姿勢として、授業開始時刻に遅刻しないように努めましょう。授業の途中から出席すると、教員や他の学生に迷惑がかかるばかりか、欠席したのと同じように十

レジュメ

レジメともいう。摘要のこと。研究報告などで、その内容を手短かにまとめて示したもの。

分な学修効果が見込めなくなってしまう。

》ノートの取り方

講義の進め方は、教員によって異なります。授業はシラバスに従って進められることが原則ですが、受講生の理解度や質問に対応するため、進度等の一部が適宜変えられることもあります。講義では学術用語も出てくるでしょう。そこで、大切なのがノートの取り方です。ノートには、板書だけではなく、教員が話したことを書き取ることも大切です。講義の要点、重要なキーワードを逃さずノートに書いていきましょう。後で見返したときに、講義の内容を思い出せるようなノートづくりが求められます。

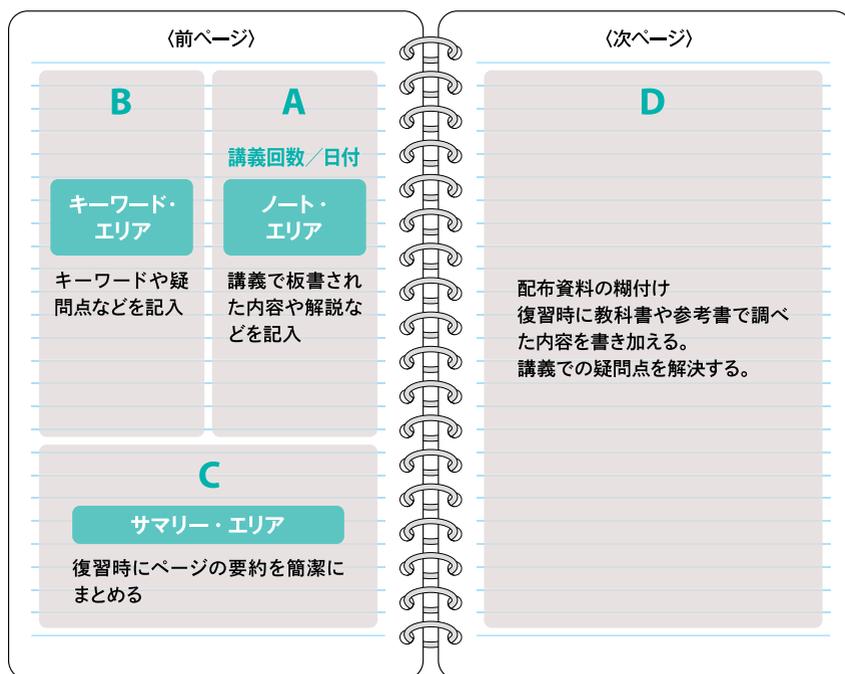
中学や高校時代と違って、教員はノートに取るべき内容を細かく指示しません。授業をよく理解することに注力し、理解をさらに深めるために自分なりに工夫してノートを取る必要があります。ノートは、復習にも役立ちますし、定期試験やレポートの提出時などには授業を振り返るために不可欠なものとなるでしょう。また、履修した授業で取ったノートの蓄積は、卒業論文・卒業研究などに向けても、貴重な財産となるはずです。



良いノートをつくるための方法を一つ紹介します。授業中にはノートの上半分（または左ページ）だけを使い、下半分（または右ページ）には、後で整理し、まとめたものを記載するようにします。また、疑問点が出てきた場合には、後で教員に質問できるように、そこに記述しておきます。

この作業は、授業の内容について鮮明な記憶のあるその日のうちに済ませておくことがベストです。こうしておけば、復習にもなり、講義内容が整理された良いノートが残せるようになります。

■ ノートのレイアウト例（コーネルメソッド参考）



出典/日本大学法学部 佐渡友 哲教授・編著 2011、『大学入門—政治と経済を学ぶマナースキル』北樹出版

Message

講義の受講スタイル

確実な理解には復習が必須

理工学部電気工学科4年 佐藤 美波



子どもの頃から機械が大好きだった私は、機械を動かす電気を究めたいと思い、電気工学科に進みました。

1年次では基礎教育科目を中心に履修し、2年次では電気についての専門科目を多く履修しました。「電磁気学」や「コンピュータプログラミング」など、興味のある分野の科目ばかりで、どの授業も時間があっという間に過ぎていきました。

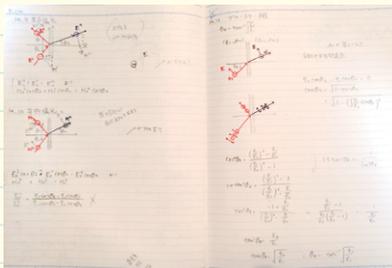
ただ、授業の進み方が早く、内容が難しいため、しっかり復習する必要があると感じました。そのため、宿題にはその日のうちに取り組み、わからなかったところは先生に何度でも質問しました。講義のすぐ後に質問しないのは、宿題とじっくり向き合い、まずはどこがわからないのかをはっきりさせたかったからです。

また、図書館で、友達と一緒によく学習しました。友達が先生とは別の解法を用いて問題を解くのを見て、「そういう解き方もあるのか」と驚くことも少なくありません。自分に合った解法を見つけるうえで、とても参考になりました。さらに、私が先生に質問してわかった内容を友達に説明することにより、私自身の理解もさらに深まりました。

講義で工夫したことは、2つあります。1つ目は、テキストへの書き込みで

す。専門科目のテキストの内容は、講義で先生の解説を聴きながらであれば理解できるものの、時間が経つと、なぜその解が導かれるのかを理解できなくなっていることがありました。そこで受講中に、途中式や先生が強調した点をテキストに書き加え、復習できるようにしました。

2つ目の工夫は、ノートづくりです。試験対策では、問題集の問題も講義用のノートに書きました。ただ解くだけでなく、見直したときにわかるように、途中式もしっかり書くようにしました。年次が上がるにつれ、学びが深まっていくと、「以前学んだ内容をもう一度確認したい」と思うことが増えます。その時に、講義内容と問題演習を一度に見直せるノートがとても役に立ちました。当時、自分がどのように問題を解いたのかが追跡できるからです。



復習に役立つよう、ノートには答えに至るまでの過程を書いておく。

※学年は取材時（2015年度）のものです。

2 演習（ゼミナール）

》演習での学び方

演習は、「ゼミナール」とも呼ばれる授業の形態の一つです。少人数の学生が特定のテーマについて自主的に研究し、発表や討論を行います。講義は、多人数が収容できる教室で教員の話をごどちらかと言えば一方的に聴くスタイルが主流ですが、演習は、学生がより積極的に授業に参加することが前提です。自らが調査・研究した特定のテーマについて発表したり、ほかの学生の研究発表を聴いたりして、互いの発表を基に討論します。それによって、さまざまな学問的刺激を受けることができます。

また、こうした活動を通して教員から親しく指導を受け、ほかの受講生とより深い交流ができるのも、演習の大きな特色です。発表の仕方や討議の方法、さらにはこれに付随する人間関係など、演習（ゼミナール）から学べることは数多くあります。ぜひ、積極的に参加してください。



演習の様子。

》プレゼンテーション

演習（ゼミナール）では、学生が研究発表をする機会が多くあります。最近のプレゼンテーションは、効率的に理解を得られるようパソコンのプレゼンテーションソフトウェアを使うことが多くなっています。無料でダウンロードできるソフトウェアもあり、マニュアル本も数多く出版されているので、使い方を学ぶことをお勧めします。

また、発表要旨とは別に、スライド画面をA4用紙1枚に6画面程度、順番に記載したものをプリントして配布資料にすると、より効果的な発表になります。



学生によるプレゼンテーションの様子。

最近、学会*でも企業でも、パソコンを活用した発表が増えています。演習でプレゼンテーションソフトウェアを使って研究発表した経験は、卒業後にどのような道に進んだとしても役に立つはずです。この使い方をマスターしましょう。

プレゼンテーションの際には、決められた時間内に発表することが大切です。事前に、友人に聴いてもらうなどしてリハーサルを行うとよいでしょう。

》ディスカッション

ディスカッションは、教育方法の一つとして重要なものです。他の学生の考えを聴いて学ぶ、違う意見を合わせて一つにまとめる場面では、ディスカッションは優れた方法です。バズセッション*、パネル・ディスカッション*、ディベート*などの手法があります。他の学生の意見を尊重し、相手を誹謗^{ひぼう}したり人格を傷つけたりしないことなどが基本的なルールであり、自らの意見を主張する際には、正しい論拠と論理が求められます。

ディスカッションをするには、事前の準備が必要となります。自分の意見が述べられないのは、話す能力が足りないからと思いがちですが、下調べや自分の中での考えがまとまっていないことが原因の場合があります。しっかり準備をして、自信をもってディスカッションに臨めるようにしましょう。

学会

学術研究者の団体。また、その会合。

バズセッション

まず、参加者が少人数グループに分かれて自由に討議。そこで得られた結論をグループの代表者が発表し、さらに参加者全体としての討議を進めるといった、演習に用いられる手法の1つ。

パネル・ディスカッション

異なる意見をもった数人の討論者（パネラー）が聴衆の面前で一定の論題に関して討議し、その後、聴衆も討議に加わって、質疑応答や意見発表を行う座談式公開討論法。

ディベート

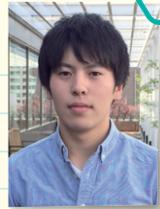
ある主題について、異なる立場に分かれて議論すること。

Message

ゼミの受講スタイル

広く調べる準備が必要

法学部3年 新井 凌雅



法学部では、3年次にゼミが始まります。私は、世界各国の政治史や議会制度の比較など、政治学のみならずさまざまな分野を専門とする吉野篤ゼミに所属しています。

ゼミの2015年度の研究テーマは、イギリスの議会政治です。前期には、13世紀から現代までを4つのグループで分担し、各グループが調べた内容を3、4回に分けて発表しました。私のグループは、17～18世紀の議院内閣制の萌芽期を担当しました。最初は、グループのメンバーと手分けをして入念に調べたつもりでも、発表を聴いたゼミ生や先生からの質問に答えられないことがよくありました。制度自体の要点をつかんでいても、制度が制定される過程や時代背景までを調べきれていなかったからです。

時代の全体像も詳細に把握しておかなければならないと気づき、参照する文献を増やしました。例えば、制度についての本を読んだら、そこに参考文献として挙がっている文化や風俗などに関する本も読むようにしたのです。さらに、質問されそうな内容を予想し、そのことについて詳しく書いたメモを作成するようになりました。

発表では、事実を整理してまとめるだけでなく、事実に対して自分がどう考え

るかも述べなければいけません。そこで、今までにない観点から分析できないか、従来、見過ごされてきた側面がないか、グループ内で検討を重ねました。おかげで、定説を批判的に読む習慣もつきました。事実を自由に解釈することは、事実をただ覚える高校までの勉強とは大きく異なり、大学ならではの学びの面白さだと思います。

後期には法学部のイベントがあり、ゼミの代表者7人が、イギリスとの比較における日本の議会政治の特徴と課題について発表します。私は代表者の1人に選ばれ、イギリスの議会政治の発展について担当します。持ち時間は5分間と短く、要点をまとめるだけでも大変ですが、自分の意見を盛り込むように発表原稿を練っています。限られた時間で自分なりの切り口を示すことは、とても楽しく、やりがいがあります。



法桜祭(学部祭)ゼミフォーラムにおける発表の様子。

※学年は取材時(2015年度)のものです。

3 実験・実習・実技

》ねらいと効果

講義や演習（ゼミナール）は、研究成果や研究の対象・手法を教員が論述し、特定の研究テーマについて教員の指導の下で発表・討論することが中心となる授業形態ですが、実験・実習・実技科目では、それ以上に、学生自らの体験と行動を通して、学修の結果をより確実なものとするのが求められます。

実験・実習には、分析装置や観測機器の使い方に習熟するとともに、学生自身が分析データ・測定データを得ることにより、あらかじめ設定した仮説に対する解答を出すというねらいがあります。授業のねらいと到達目標に関する教員の説明や指示に十分に耳を傾け、細心の注意を払って取り組むようにしましょう。



実習の授業風景。

実験の授業風景。



》予習とレポート

実験・実習・実技科目の授業を受ける際に最も重要なのは、あらかじめ、どのような課題について授業が行われるかを予習することです。

何が大切であるか、どういうことが危険であるか、何を修得するための実験・実習・実技であることを事前に知っておくと、理解も早く、事故などを未然に防ぐことができます。

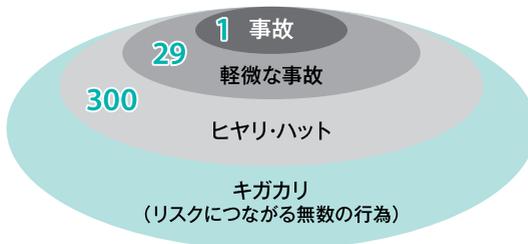
また、実験・実習・実技科目では、終了後、その日のうちにレポートにまとめることも重要です。新鮮な記憶があるうちに記録しておかないと、次第に忘れて、レポートや論文が書けなくなってしまうからです。

実験・実習・実技科目が好きになり、良い成果が得られるようにするコツは、**授業前の予習と、授業後にレポートをまとめる習慣をつける**ことです。

》安全の確認

実験・実習・実技において絶対に忘れてならないのが、**安全の確保**です。「**ハインリッヒ*の経験則**」にあるように、1件の重大な事故や災害の背後には29件の比較的軽微な事故・災害があり、さらにその背景には300件のヒヤリ・ハット*が潜んでいるといわれています。つまり、重大な事故や災害を未然に防ぐには、一歩間違えば事故や災害の発生に結びつきかねないヒヤリ・ハット、あるいは、キガカリの段階で対処しておくことが重要です。

■ハインリッヒの経験則



事故・災害は決して不測の事態ではなく、配慮の不

ハインリッヒ

Herbert William Heinrich

(1886-1962年)

アメリカの数学者。損害保険会社の技術・調査部で安全技師を務めた。労働災害の発生確率を統計的に解析し、1929年に発表した論文で経験則「ハインリッヒの法則」を提唱した。

ヒヤリ・ハット

幸い事故には至らなかったものの、一瞬ヒヤリとしたりハットとしたりしたこと。

足から生じたと考えるべきなのです。

実験・実習・実技の授業では、指導教員やティーチング・アシスタント（TA）*、スチューデント・アシスタント（SA）*による注意事項の説明に十分に耳を傾け、常に細心の注意を払ってください。体調が十分でないことに起因する事故も起こり得るので、睡眠不足に留意し、体調管理に気をつけることは、事故を防ぐ観点から重要です。

安全面から、実験・実習・実技それぞれの授業内容に適した服装で受講してください。実験では白衣、場合によっては実験用保護メガネ・手袋等の着用が必要です。野外で実習を行う場合には、雨、日差し、虫よけなどの対策を万全に行い、調査にふさわしい靴の着用を心掛けましょう。また、事故を防ぐため、出水や雷など天候の急変に対する指導教員の指示には、迅速に従ってください。

》グループ行動

実験・実習・実技の授業は班単位で進められることが多く、自ら率先して参画するとともに、グループの一員として役割を分担し、協力し合うことが重要です。実験器具・観測機材などの準備と片付けも積極的に行い、授業中には記録をこまめにとるようにしましょう。



河川環境調査の実習風景。

ティーチング・アシスタント（TA）

科目担当教員の指示により、学部の実験・実習等の教育補助を行う業務の総称、もしくはその担い手である大学院学生。

スチューデント・アシスタント（SA）

コンピュータ科目や実験・実習科目等のほか、受講に際しての留学生への対応や、ハンディのある受講生等への学習補助を行う学部学生。

Message

実験・実習・実技の受講スタイル

疑問点を残さないことが大事

短期大学部食物栄養学科 1年 加茂 侑南



食物栄養学科には、1年次に6つの実験・実習科目があります。月曜と金曜の午後3時限分が充てられ、1科目を3週ごとで行っています。実験・実習は班での活動が基本で、メンバーはたいがい固定です。

授業は実験・実習が終わったら終了となるので、私の班では、手際よく進めるためにはどうすればよいか、よく話し合っています。例えば、実験の記録係を1人決め、後でそれを共有するようにしました。個々で記録していると時間のロスになり、抜け漏れも出てくるからです。役割分担をしたら、実験を効率よく、かつ確実に進められるようになりました。

レポート提出日は次の授業（3週間後）です。考察を書くときは、まず教科書を読みます。それでわからなければ、インターネットで調べ、大学の図書館で専門書を読んで情報の裏付けをしています。インターネットはすぐに情報を得られますが出所が曖昧で、一方、専門書は詳しいけれども、見当を付けずに調べるのが難しいので、併用しているのです。

レポートはすべて手書きです。下書きをしてから書く人もいますが、私は構想を練ってから直接書いています。最初は、何をどう書けばよいかかわからず、資料

を抜き書きしたこともありましたが、毎週書くうちに、要点をつかみ、自分の言葉で書けるようになりました。どの先生も添削をして返却してくれるので、必ず見直して復習しています。

常に週2本のレポートを書くのは大変ですが、班員と文献の情報交換をしながら、ため込まないようにしています。実はゴールデンウィークに遊んでしまい、レポート提出日前はかなり苦労しました。後で、ほかのメンバーは着々と進めていたのを知り、私もしっかり学習しなければと気持ちを入れ替えました。

講義科目で学ぶ内容は実験・実習科目にもつながるので、必ず復習し、疑問点を先生や友達に質問しています。わからないことを放置しておく、後々大変です。レポートの文章力が上がったといった成長感を糧に、さらに学びの世界を広げていきたいと思います。



レポートの一部。

※学年は取材時（2015年度）のものです。

4 論文・レポート

》心構え

大学での学びにおいて、論文やレポートを書くことは必ず求められます。論文を書くという場合、卒業論文がその代表的なものですが、学部・学科によってその内容には違いがあります。書き方や文字数については、担当教員の指示に従うようにしましょう。

学問研究は、先人の研究成果（先行研究）の上に自身の学修・研究内容を上乗せするものであり、徹頭徹尾、先人の研究成果を学びを参照しない研究はありません。つまり、学術論文を書くためには、書こうとしている分野や課題についての先行研究を学ぶ必要があります。大学に大きな図書館が存在するのはそのためであるとも言えます。

レポートを書く場合、教員が課題名や書式を指示してくれるか、シラバスに記載があります。これらの指示に従って執筆しましょう。



レポートには、文献研究による報告、実験・調査結果の報告、アンケート・インタビュー調査の報告など多様な類型があります。学術論文と比較すれば、書くという作業の大きさは軽減されますが、これらを完成させるための緊張感は同じです。

文献研究は、論文と同じような手法を取ります。アンケートやインタビュー調査では、あらかじめアンケートする項目やインタビューする質問などを吟味し整理しておきましょう。自分が主張したいことを念頭において、これを調査によって検証し、論証しながら書き進めることが大切です。また、グラフや図表の使い方を習熟し、適宜レポートに挿入すれば、より見やすいレポートとなるでしょう。

》論文・レポートを書くための情報収集

論文・レポートを書くためには、書籍や論文、雑誌などの資料を効率的に検索できるよう、図書館での情報収集の仕方をマスターすることが大切です。インターネットが普及した現在では、学生自身のパソコンや携帯端末でも書籍や論文を検索し、読めるようになってきました。大手書店の書籍検索機能を活用するのもよいでしょう。

また、パソコンに内蔵されている文書作成機能を十分使いこなせるよう、親しんでおくことが大切です。写真や図表の取り入れ方はもちろん、注釈や参考文献の挿入方法など学術論文の書き方もマスターしておくといよいでしょう。論文作成時の起承転結の付け方なども、理解しておくべきです。論文・レポートの書き方に関する本を熟読しておくことも重要です。

論文にせよレポートにせよ、書き方をマスターする王道はありません。指導を受けている教員にできるだ

けならって、日頃から書く訓練をしておきましょう。

》絶対にしてはいけない「無断引用」

論文やレポートは、自らの考えを書くものですが、先行研究を無視して書くことはできません。必要に応じて、他者の文章を「引用」することがありますが、出典を明らかにするなど、いくつかの最低限のルールがあります。ウェブ上の複数のページから文章をコピー&ペーストし、レポートを仕上げるといったことは、ルールに則らないばかりか、そもそも自分の文章を書く力を成長させる上でもマイナスなので、絶対にしてはいけません。

》よい論文・レポートを書くためのコツ

論文・レポートを書くには、読書力が問われます。読書なくしては、よい論文やレポートを書くことはできません。必要だと思った図書は、精読することが大切です。あるいは、パソコンに感想文などを書き込みながら読むのも一つの方法です。自らの専門分野の周辺領域の論文なども、必要に応じて目を通しておくと良いでしょう。これらの書籍や論文の引用文献や参考文献を見れば、自分自身の学修に役立つ関連の文献を容易に見いだせるはずです。



あなたにとって、大学図書館はどのようなところでしょうか。

授業のテキストや参考書を読んだり、本を借りたり、コピーをとったり、資料を取り寄せたりするところ、または、新聞や趣味の雑誌を読むところ、映画等の視聴覚資料を見るところ、課題をこなすために情報の手掛かりを得るところ、仲間とワイワイ意見を交換し学びを高めるところ、でしょうか。

大学図書館は、これらすべてに「YES!」と答えます。大学図書館は、学生の皆さんの知らないうちに、変貌しています。

「空間・場」としての図書館

今までの大学図書館は、静かな雰囲気の中で、主に学生が個別に学修する場を提供してきました。

しかし、これからの図書館は、可動式の机、椅子、ホワイトボード等を備えて、自由な議論や意見交換の場や、仲間とともに課題をこなす場も新たに提供していきます。

学生の皆さんは、他のグループや他の人の活動を見て、ヒントを得たり、さらに課題を深く掘り下げたり、意見交換を活発にしたりすることもあるでしょう。自分一人の学修では気づかなかったのに、他の人の意見を聴いて、気づくことがあるかもしれません。一緒に何かをすることは、人にとって欠かせない欲求です。

まるで洪水のようにあふれる情報が身の回りにある今、的確な情報にたどり着くためには、仲間の助けが必要です。

次世代の人に必要な力を定めたものに、「21世紀型スキル」があります。その中で、世界情勢や自然環境の刻々たる変化に対応するには、常に学び続けていく力や、多様な価値観を持つ人と議論して、起きている問題を特定し、協働で解決していくことが必要とされています。

大学図書館という空間・場を使って、授業が行われることもあります。使いたい資料は、すぐ手の届くところにあります。大学図書館は、皆さんの「知りたい、伝えたい」を実現するところなのです。

「情報資源」としての図書館

自由な議論の中で、気になることが出てきたら、紙の資料だけでなく、パソコンを使ってデータベースや電子資料を調べることもできます。

探している資料がどこにあるかを検索するには、OPAC (Online Public Access Catalog) を活用しましょう。

所属する学部図書館に所蔵のない資料は、他学部図書館や他大学図書館などから借りたり、コピーを取り寄せたりするほか、実際に閲覧に行くこともできます。手続きの方法は、カウンターに相談してください。

図書館で使えるデータベースには、日本語のデータベースもあります。

これらのデータベースでは、新聞記事を探したり、言葉の意味を知するのに、複数の辞書を同時に調べたりすることもできます。

最近では、各種データベース、図書館のOPAC、電子ジャーナルなど、どの資源を利用するかを気にせずに、情報を手にできます。調べたいと思う「言葉」をボックスに入力するだけで、情報が入手できる仕掛けが開発されているからです。日本大学でも、間もなくその仕掛けを使うことができるようになります。

大学図書館は、皆さんにとって、身近な情報の宝庫です。気軽に調べて、新しい仕掛けも、どんどん利用してみましょう。

検索したら、オリジナル資料にぜひ当たってみてください。大学図書館には、ベストセラーのほか、良書がそろっています。良い本は、人の心を豊かにし、人生を変えることもあります。

「人的資源」としての図書館

一人ひとりが学ぶことを意識し、学ぶ力をつけることが必要です。学ぶ力を身に付けるには、図書館で情報リテラシーを身に付けるのが、近道です。情報リテラシーとは、情報を主体的に



国際関係学部図書館

使いこなす能力のことを言います。

この情報リテラシーについての知識やスキルをもっているのが、図書館員です。

図書館員は、学生の皆さんが授業の予習・復習をするために、あるいは課題に取り組む、興味あるテーマを調べるために、必要な情報を主体的に使いこなせるようサポートします。情報をうまく使いこなすには、ちょっとしたコツがあります。コツさえつかめば、関心が湧き、学修意欲が出てくるでしょう。もっと深く調べたくなり、いつの間にか、自ら主体的に調べることが楽しくなっているでしょう。

大学での学びや体験を実りあるものにするために、大学図書館を手段として使うとよいでしょう。調べ方がわからなければ、図書館のカウンターに気軽に声を掛けてください。いつでもサポートします。

(研究推進部学術情報管理課)